

## 教師の教育評価や学習指導に対する 意識についての研究

—— 小学校教師の認知に関する分析 ——

藤岡 秀樹\*

(1991年10月15日受理)

### 問 題

SD法 (Semantic Differential method) は、Osgood, Suci, & Tannenbaum (1957)が、多様な概念の持つ内包的・情緒的意味を明らかにするために用いた多次元尺度構成法の1つである。

このSD法を用いて、教師の教育評価や学習指導に関する用語や概念の認知を調べた研究としては、井上の一連の研究がある。最初の研究(井上, 1974)では、刺激語として、①教育指導の指針に関するもの(例:「学習指導要領」「検定教科書」)、②学習結果の測定方法に関するもの(例:「教師自作テスト」「市販テスト」)、③学習結果の解釈の仕方に関するもの(例:「相対評価法」「絶対評価法」)、④学習結果の報告の仕方に関するもの(例:「通信簿」「内申書」)、⑤教育全般に関するもの(例:「全人格的教育」「高校全入制」)をとりあげている。小学校教師に評定させたところ、好意度に世代差が見られた用語は、6つであった。若年層程、好意的な認知が見られた用語は「教材の自主編成」「絶対評価法」の2つであり、若年層程、非好意的な認知が見られた用語は「学習指導要領」「検定教科書」「市販テスト」「標準学力検査」の4つであった。前者は、望ましい、そうあるべき概念であるのに対して、後者は今日の教育評価体系で使用され、様々な問題点や批判点を持つものである。性差の分析では、年中群(34~43歳)の男性は年長群(44~53歳)の教師の認知に類似しているのに対して、年中群の女性は年少群(24~33歳)の教師の認知に類似している傾向が見出された。

次に、刺激語として、今日までの評価観を示す「相対評価」「学習の方向目標論」「一斉学習指導」「集団標準に基づく(集団準拠)テスト」「履修主義的教育観」、今日の評価観を示す「到達度評価」「学習の到達目標論」「習熟度別学習指導」「達成基準に基づく(目標準拠)テスト」「修得主義的教育観」をとりあげ、評定を行わせた。

小学校教師のSDプロフィールの世代差の分析(井上, 1979)では、「学習の方向目標論」を除く他の今日までの評価観を示す用語と「習熟度別学習指導」において、認知の世代差が見られ、若年層になるにつれて、非好意的に認知されていた。また、世代差の見られなかった用語

\* 岩手大学教育学部

の大半は、今日の評価観に関するものであった。管理職教師（校長）と一般教師との比較（井上，1981）では、「一斉学習指導」「相対評価」「到達度評価」で差異が見られ、いずれも管理職教師群の方がより好意的認知を示していた。

さらに、「(教授学習活動の)羅生門的接近」「五段階評定」(以上今日までの評価観)「工学的接近」「観点別学習状況」(以上今日の評価観)の刺激語を加え、中学校教師に実施したところ（井上，1982），世代差が見られた用語は、「集団準拠テスト」「五段階評価」（若年層の方が非好意的認知）「習熟度別学習指導」（若年層の方が好意的認知）「目標準拠テスト」（「集団準拠テスト」よりも好意的だが，50歳代とそれ以外の層の間に意識のずれが見られる）の4つであった。教師の専攻差が見られた用語は、「工学的接近」「一斉学習指導」（芸能系教師のみ非好意的認知）「五段階評定」「履修主義的教育観」（文系，理系，芸能系共に非好意的だが，特に芸能系がその傾向が強い）の4つであった。

世代差，換言すれば，教職経験年数の差が見出された項目は，主として今日までの評価観を示す用語であったことや「習熟度別学習指導」の認知が小学校教師と中学校教師の間で逆の認知を示したことは，示唆的である。後者については，中学生の学力の個人差が大きく，学業不振児も多いことを反映した結果であると言えよう。

以上の様な井上の一連の研究が行われてから，約10年余り経過した。この間，指導要録の改訂や通知表の改革に代表される教育評価の改善が行われてきた。例えば，1980年の指導要録の改訂では，「各教科の学習の記録」欄の「所見」が「観点別学習状況」に改められ，能力分析的な観点が立てられた。また，全教科に「関心・態度」という情意的目標が設定された。さらに，1991年の改訂では，小学校低学年の「各教科の学習の記録」欄の「評定」が廃止され，小学校中学年・高学年では，絶対評価を加味した三段階相対評価に改められ，「評定」よりも「観点別学習状況」にウェイトが置かれるようになった。そして，「観点別学習状況」では「関心・意欲・態度」が重視され，全般的にドラスティックな変化が見られた。この様な教育行政サイドの変化も，現場の教師が抱く教育評価のイメージに少なからぬ変容をもたらしてきたと思われる。本研究では，井上の研究で用いられた教育評価や学習指導に関する用語を取り上げ，SD法による認知のされ方，世代差（教職経験年数の差）及び，時代の変化を調べることを目的とする。また，新たに1992年から小学校の低学年で実施される「生活科」と最近の教育現場での実践でよく用いられているキーワードの1つである「自己教育力」を付加して調査を行うこととする。

## 方 法

### 1. 被験者

岩手県内の公立小学校教師400名に郵送法により，質問紙調査を依頼した。対象者は，1990年度岩手県学事関係職員録に基づき，学校規模や地域，性別，年齢を勘案して抽出された。回収された質問紙は167部であった（回収率41.8%）が，その内，記入もれなどを除外した有効数は162部であった。

### 2. 調査項目

#### (1) 評定用語

井上（1979，1981，1982）の一連のSDプロフィールの研究で取り上げられた教育評価や学習指導に関する用語の内，“相対評価”“到達度評価”“一斉学習指導”“習熟度別学習指導”の4つと

新たに付け加えた“絶対評価”“指導要録”“標準学力検査”“完全習得学習”“生活科”“自己教育力”の6つ、合計10の用語を使用した。

### (2) 形容詞対

井上の研究で用いられたSD法の形容詞対をそのまま採用した。内訳は、「よい—悪い」「正しい—間違っている」「優れている—劣っている」(以上価値的評価)「好きである—嫌いである」「おもしろい—つまらない」「頼もしい—頼りない」(以上魅力的評価)「易しい—難しい」「役に立つ—役に立たない」「便利である—不便である」(以上実用的評価)「変化に富む—変わらない」「生き生きしている—手応えがない」「活動的である—不活発である」(以上活動的評価)「あたたかい—冷たい」「新しい—古い」「支配的である—服従的である」(以上潜在的評価)の15対である。

### (3) 評定段階

「非常にそう思う」「かなりそう思う」「少しそう思う」「どちらとも言えない」という段階を設けた(7段階評定)。形容詞対の方向性、評定用語の提示順序をカウンターバランスした調査用紙を作成した。SD法による本調査を[設問1]とし、その後には学業不振の規定因の重要度を調べる調査(本論文では割愛する)を[設問2]として、質問冊子を作った。

### (4) 教示

[設問1]の教示は、下記の通りである。「次頁以降に教育評価や指導法に関する用語が呈示されています。枠の中の用語に対して、先生のいづく意識あるいは態度は、その下にある7段階の形容詞の尺度の内でのどの辺にあたるのかを第一印象で判断して、例のようにくぎりの上に○印を書き入れて下さい。この○印を記入する判断には、正しいとか誤ったとかいうものはありませんのであまり深く考えこまないで、正直にありのままの印象をご記入くださるようお願いいたします。どうしても判断しにくい場合は、中央の“どちらでもない”にお付け下さい。用語については10語、形容詞対は15尺度ありますので、全ての尺度に○印を書き入れ、記入もれのないようお願いいたします。」

なお、評価に関する3つの用語の評定では、刺激語の後に、次の様な説明を付加した。

「**相対評価**」—学級や学年の集団基準に基づいて、個々の生徒の相対的位置を評定する評価方法(5段階相対評価の場合、5と1の人数は各7%、4と2の人数は各24%、3の人数は38%となる)。

「**絶対評価**」—教育(学習)目標や教育(学習)内容の検討を基に、事前に評価の基準を設定し、生徒がその基準に達したかどうかを評定する評価方法(一般には100点法による評価や各段階に入る人数に制約のない段階評定が該当)。

「**到達度評価**」—具体的な到達目標(学習目標)にどの程度、個々の生徒が到達しているのかを、各到達目標(学習目標)ごとに評価を行う評価方法。

## 3. 手続き

1991年2月に被験者へ質問冊子と返送用封筒を郵送し、2週間以内に回答するよう依頼した。

## 結果と考察

### 1. データの処理

SD法の結果の得点化は、形容詞対の好意的方向程、得点が高くなるように行った。得点の分

布は1~7点の範囲になる。世代差(=教職経験年数の差)を調べるために、被験者を3群に分類した。22歳から34歳までの被験者を年少群(Y群)、35歳から49歳までの被験者を年中群(M群)、50歳以上の被験者を年長群(E群)とし、各群別に評定値の平均と標準偏差を求めた。各群の男女別人数と平均年齢、平均教職経験年数を表1に示す。3群間で評定値に有意差が見られるかどうかを調べるためにF検定を行い、有意であったときは、さらに多重比較(Ryanの法)を行った。

表1 各群の被験者の内訳

	男性	女性	合計	平均年齢	平均教職経験年数
年少群	24	38	62	28.2歳	5.6年
年中群	25	24	49	42.8歳	19.9年
年長群	27	24	51	55.4歳	34.3年

2. 各用語の認知傾向

(1) 相対評価

“相対評価”のプロフィールを図1に示す。図1から、相対評価は少し古くて冷たく、やや嫌いで、支配的であることがわかる。全般的に中立的な認知の傾向が見られるが、評価方法を示す3つの用語の内、最も好意的でなく、若年層程その傾向が強い。F検定の結果、有意差が見

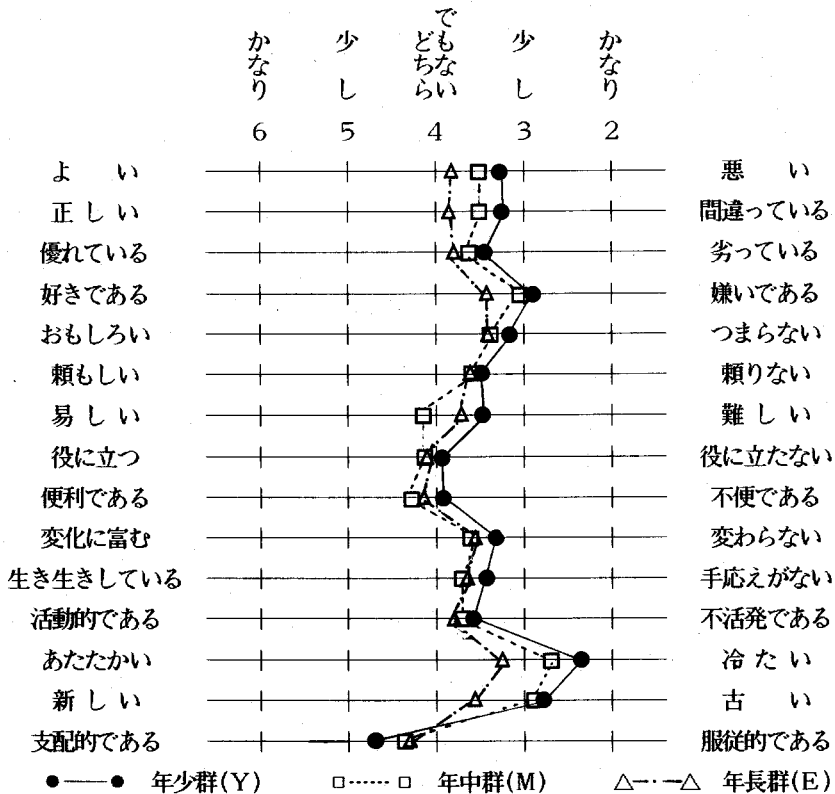


図1 “相対評価”のプロフィール

られたのは「あたたかい—冷たい」( $F=6.398, df=2/159, p<.01$ )と「新しい—古い」( $F=6.554, df=2/159, p<.01$ )の2尺度であった。多重比較の結果、年少群や年中群は、年長群よりもより冷たく(Y-E;  $p<.01, M-E; p<.05$ )、より古い(Y-E;  $p<.01, M-E; p<.01$ )と認知されていることが見出された。

井上(1979)の結果と比べてみると、プロフィールの形状は極めて類似し、年代が低くなるにつれて非好意的になっている点も合致している。ただ、井上の結果では、実用的評価の3尺度において、少し好意的な認知を示していたが、本研究では、それが弱まり、ほぼ中立的な認知を示している点が相違点だと言えよう。

(2) 絶対評価

“絶対評価”のプロフィールを図2に示す。図2から、絶対評価はかなりよくて、正しく、役に立つことがわかる。また、少しおもしろくて好きであり、生き生きしていると捉えられている。「易しい—難しい」と「支配的である—服従的である」の2尺度を除けば、全般的に好意的な認知を示しており、“相対評価”の結果とは対照的である。プロフィールを概観すると、年少群と比べて、年長群や年中群の方が好意的な認知をしていることがわかる。

F検定の結果、「優れている—劣っている」( $F=3.092, df=2/159, p<.05$ )「おもしろい—つまらない」( $F=3.074, df=2/159, p<.05$ )「易しい—難しい」( $F=3.286, df=2/159, p<.05$ )「生き生きしている—手応えがない」( $F=6.104, df=2/159, p<.01$ )「活動的である—不活発

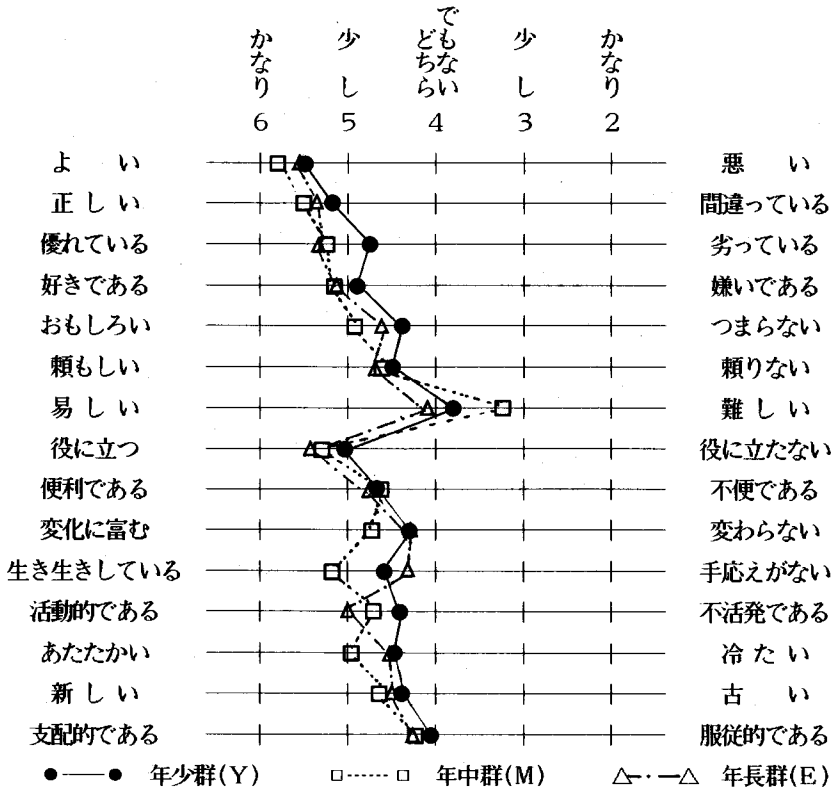


図2 “絶対評価”のプロフィール

である」( $F=3.790, df=2/159, p<.05$ )の5尺度で有意差が見出された。多重比較の結果、年長群は年少群よりも、より優れている( $p<.05$ ) 活動的である( $p<.01$ )と捉え、年中群は年少群や年長群よりも、生き生きしている(M-E;  $p<.01, M-Y; p<.05$ )と捉え、年中群は年少群よりもおもしろく( $p<.05$ )、年長群よりも難しい( $p<.05$ )と捉えていることがわかった。

なお、井上(1979)の研究では、“絶対評価”を刺激語として用いていないので、プロフィールの比較はできない。

(3) 到達度評価

“到達度評価”のプロフィールを図3に示す。図3から、“到達度評価”は、かなりよく、役に立ち、正しくて優れている、そして、少しおもしろくて、頼もしく、好きであると認知されている。また、少し便利で、変化に富み、生き生きして活動的であり、あたたかくて新しいが、少し難しいものと捉えられている。一般的にプロフィールは、“絶対評価”と酷似しているが、“到達度評価”の方が「役に立つ」という評定値が高いのが目立つ。

F検定の結果、有意差が見られた尺度は「新しい-古い」のみで( $F=3.804, df=2/159, p<.05$ )、多重比較の結果、年長群が年少群よりも、より新しいと捉えていること( $p<.05$ )がわかった。若年層にとっては、“到達度評価”という概念は、ある程度熟知されており、ベテラン層程には、新鮮味を感じていないということが原因であると思われる。

井上(1979)の結果と比べると、本研究の方が価値的尺度の評定値が少し高く、「新しい」の

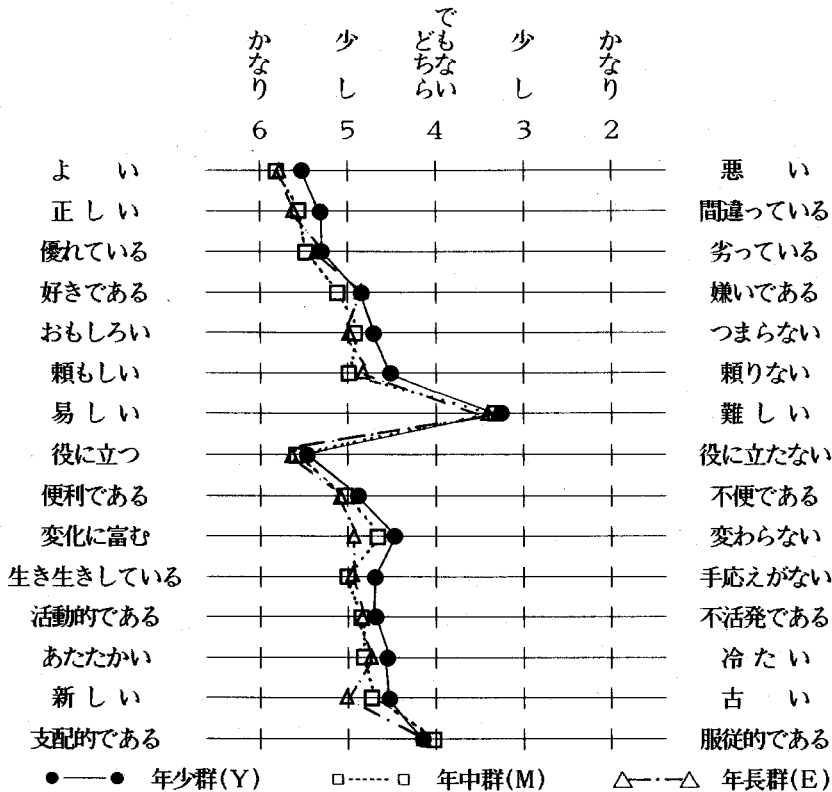


図3 “到達度評価”のプロフィール

評定値が低い。約10年前の当時は、“到達度評価”の概念が現場に導入されたばかりで、極めて新しい概念であり、価値的評価を行うのも難しかったので、この様な差異が生じたのではないかと推察できる。全般的に、井上の結果よりも平準化している。

(4) 指導要録

“指導要録”のプロフィールを図4に示す。図4から、“指導要録”はやや支配的で役に立つが、少し古くて冷たく、また、難しくてやや嫌いであることがわかる。

F検定の結果、「正しい—間違っている」( $F=3.900, df=2/159, p<.05$ )「好きである—嫌いである」( $F=3.225, df=2/159, p<.05$ )「易しい—難しい」( $F=4.822, df=2/159, p<.01$ )「変化に富む—変わらない」( $F=5.327, df=2/159, p<.01$ )「新しい—古い」( $F=4.529, df=2/159, p<.05$ )「支配的である—服従的である」( $F=3.581, df=2/159, p<.05$ )の6尺度であった。多重比較の結果、年長群は年少群や年中群と比べて、より正しいと認知し(E-Y;  $p<.01, E-M; p<.05$ )、年少群は年長群よりもより嫌いで( $p<.05$ )難しく( $p<.01$ )古くて( $p<.01$ )支配的である( $p<.01$ )と捉えていること、年少群は年長群や年中群と比べて、より変わらないもの(Y-E;  $p<.01, Y-M; p<.01$ )と認知していることを見出した。この結果から、若年層の教師は中堅以上の教師と比べて、より非好意的な捉え方をしていることがわかる。

なお、井上(1979)の研究では、“指導要録”は取り上げられていないので、比較はできない。

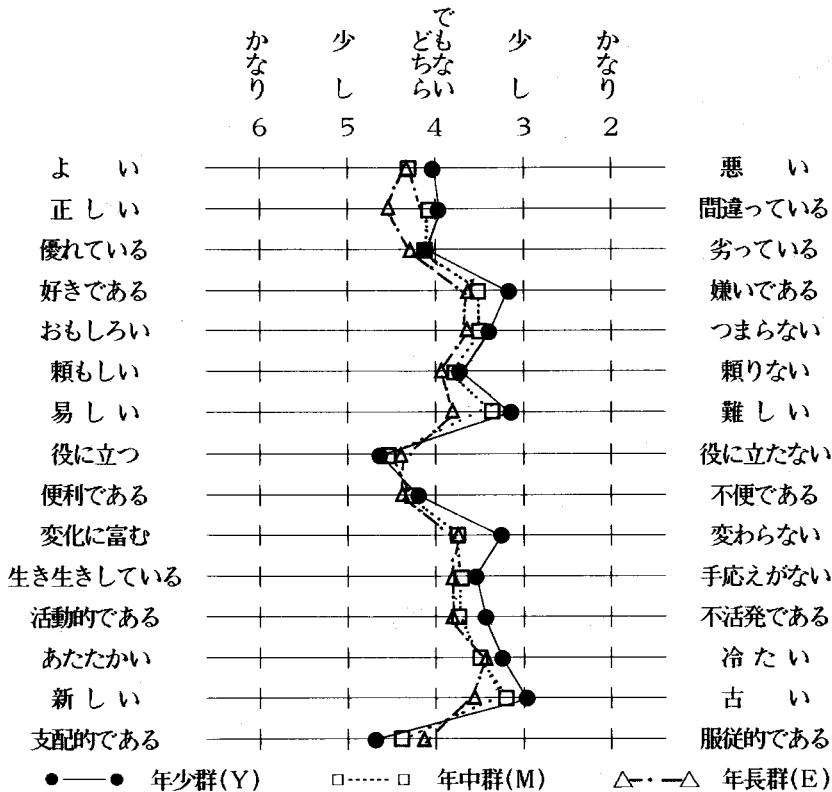


図4 “指導要録”のプロフィール

(5) 標準学力検査

“標準学力検査”のプロフィールを図5に示す。図5から、“標準学力検査”はやや役に立ち、便利であるが、やや冷たく、古いことがわかる。しかし、全般的に中立反応が多く、プロフィールは平準化している点が特徴と言える。

F検定の結果、「変化に富む—変わらない」( $F=4.739, df=2/159, p<.05$ )「生き生きしている—手応えがない」( $F=4.973, df=2/159, p<.01$ )「新しい—古い」( $F=6.068, df=2/159, p<.01$ )「支配的である—服従的である」( $F=6.499, df=2/159, p<.01$ )の4尺度で有意差が見られた。多重比較の結果、年少群は年長群よりも、より変わらなくて( $p<.01$ )手応えがなく( $p<.01$ )、古くて( $p<.01$ )支配的である( $p<.01$ )と捉えていることがわかった。若年層程、否定的な認知が強まるが、全体を概観すると、ほぼ中立的な認知の傾向を示していると言える。本県の場合、かなりの小学校で標準学力検査が年度末や初めに実施され、活用されている。「標準学力テスト批判」が大きな話題となってから十数年以上も経過したことや、本県では、標準学力検査をめぐる問題(例えば、強い批判)がそれ程顕在化していないことなどにより、このような結果になったのかもしれない。

井上(1979)の研究での“集団標準に基づくテスト”のプロフィールとよく似ている点は興味深い。若年層ほど非好意的認知を示している点も合致している。

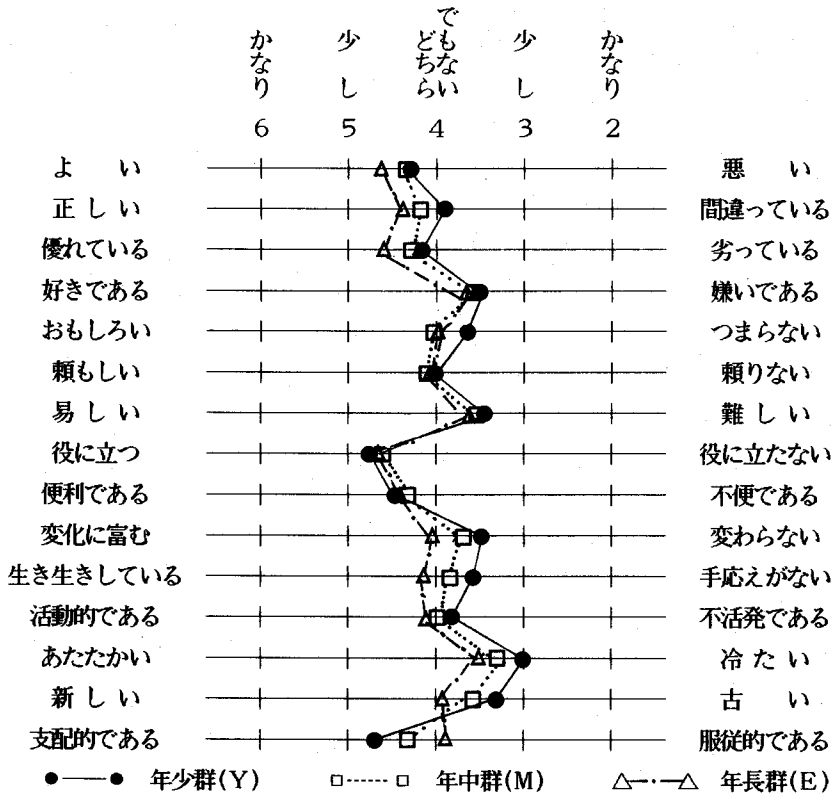


図5 “標準学力検査”のプロフィール



(6) 一斉学習指導

“一斉学習指導”のプロフィールを図6に示す。図6から，“一斉学習指導”は、少し役立ち、よくて正しく、便利であるが、少し難しく、古いものであると捉えられていることがわかる。“一斉学習指導”に対する批判は現在でも厳しく、当初“一斉学習指導”のSDプロフィールは、かなり非好意的な認知傾向を示すであろうと予想していた。しかし、結果は予想と異なり、「難しさ」と「古さ」の尺度を除いて、ほぼ中立もしくはやや好意的な認知構造を示している。特に、価値的評価を示す3尺度で、やや好意的な認知を示した点は、意外であった。

F検定の結果、「よい—悪い」( $F=4.751, df=2/159, p<.01$ )「優れている—劣っている」( $F=5.796, df=2/159, p<.01$ )「易しい—難しい」( $F=4.605, df=2/159, p<.05$ )「役に立つ—役に立たない」( $F=3.110, df=2/159, p<.05$ )の4尺度で有意差が見られた。多重比較の結果、年中群は年少群よりも、より役に立ち( $p<.05$ )、よい( $p<.01$ )と認知し、年長群や年中群は年少群よりも、より優れていると認知していること(Y-E;  $p<.01, M-E; p<.01$ )が見出された。また、年少群や年中群は年長群よりも難しいと捉えていること(E-Y;  $p<.01, E-M; p<.05$ )もわかった。一斉学習指導は難しく、古いものであると認知されているが、特に難しさに関しては、若年層程、強く意識している。これは、教職経験年数の少なさが反映したものであり、当然であると思われる。

井上の結果と比較すると、「古い」「支配的である」の認知が弱まり、価値的尺度と「好きで

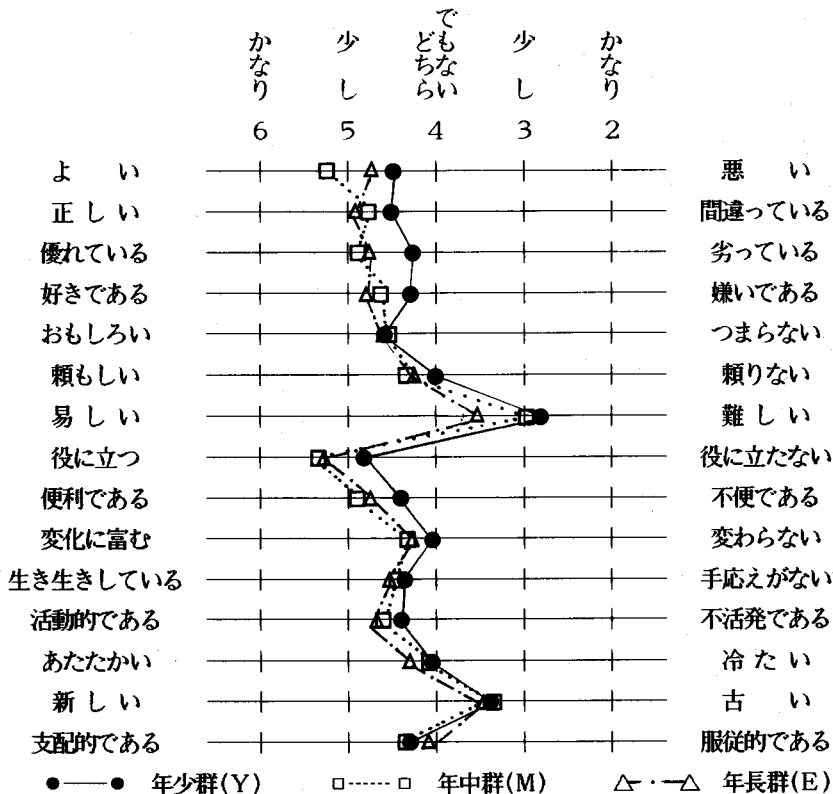


図6 “一斉学習指導”のプロフィール

ある」が中立からやや好意的認知へ変化し、「おもしろい—つまらない」「生き生きしている—手応えがない」「活動的である—不活発である」が非好意的認知から好意的認知に転じ、「変わらない」「冷たい」が非好意的認知から中立に変化したことが見出される。全般的に見ると、否定的認知からわずかばかり肯定的認知に変化したと言えよう。

(7) 完全習得学習

“完全習得学習”のプロフィールを図7に示す。図7から、“完全習得学習”は、少しよくて正しく、優れており、役に立つが、かなり難しいということが見出される。プロフィール全体を概観すると、若年層よりも中堅層の方が、好意的認知を示していることがわかる。“一斉学習指導”と比べてみると、“完全習得学習”の方が、価値的評価は高く、「古さ」のイメージを抱いた“一斉学習指導”とは対照的に、「新しさ」のイメージをやや抱いている。“完全習得学習”の方がかなり難しいと感じている点も、両者の相違点である。

F検定の結果、「好きである—嫌いである」( $F=4.284, df=2/159, p<.05$ )「頼もしい—頼りない」( $F=3.450, df=2/159, p<.05$ )「変化に富む—変わらない」( $F=3.982, df=2/159, p<.05$ )「生き生きしている—手応えがない」( $F=4.436, df=2/159, p<.05$ )「活動的である—不活発である」( $F=3.754, df=2/159, p<.05$ )の5尺度であった。多重比較の結果、年長群や年中群は年少群と比べて、より頼もしくて(E-Y;  $p<.05, M-Y; p<.05$ )変化に富み(E-Y;  $p<.05, M-Y; p<.01$ )、活動的である(E-Y;  $p<.05, M-Y; p<.05$ )と認知している。ま

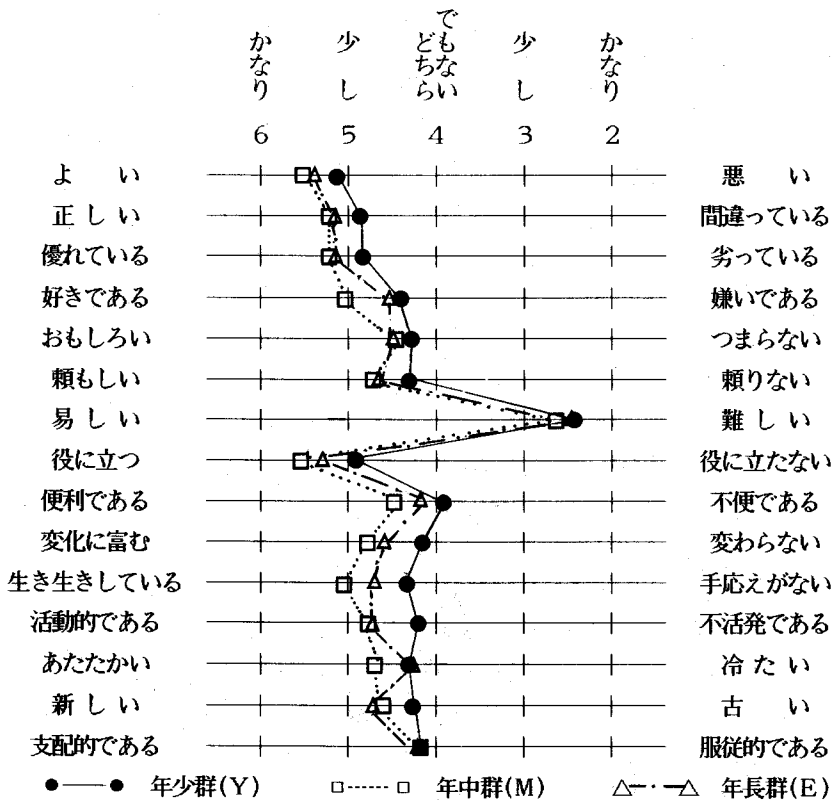


図7 “完全習得学習”のプロフィール

た、年中群は年少群や年長群と比べて、より好きであると感じており (M-Y;  $p < .01$ , M-E;  $p < .05$ ), 年中群は年少群よりも、生き生きしていると感じている ( $p < .01$ ) こともわかった。

“完全習得学習”の概念が日本の教育現場に導入されたのは、1970年代であるが、主に Bloom 学派の翻訳を通してである。その概念なり、知識なりは幾分普及されたものの、実践としてはまだ十分に行われていない。「難しさ」が強く意識されたのも、このことを反映しているからかもしれない。評定値の標準偏差がやや大きく、認知の仕方に個人差が目立つ点も特徴である。

(8) 習熟度別学習指導

“習熟度別学習指導”のプロフィールを図8に示す。図8から、“習熟度別学習指導”は、少しくて、役に立ち、優れているが、少し難しいと捉えられていることがわかる。

F検定の結果、有意差が見られたのは「支配的である-服従的である」( $F = 5.633$ ,  $df = 2/159$ ,  $p < .01$ )のみで、多重比較により、年少群は年長群や年中群よりも支配的であると認知されていることが見出された (Y-E;  $p < .01$ , Y-M;  $p < .05$ )。

“一斉学習指導”の結果と比べてみると、“習熟度別学習指導”の方がやや変化に富んでいると認知されている点と、“一斉学習指導”は少し古いと捉えられているのに対して、“習熟度別学習指導”はやや新しいと捉えられている点を除けば、プロフィールは酷似している。

井上の結果と比べると、「おもしろい」「好きである」の評定値が小さくなり、「難しさ」もやや強く感じている点を除けば、全体的傾向はほぼ合致していると言える。また、若年層よりも

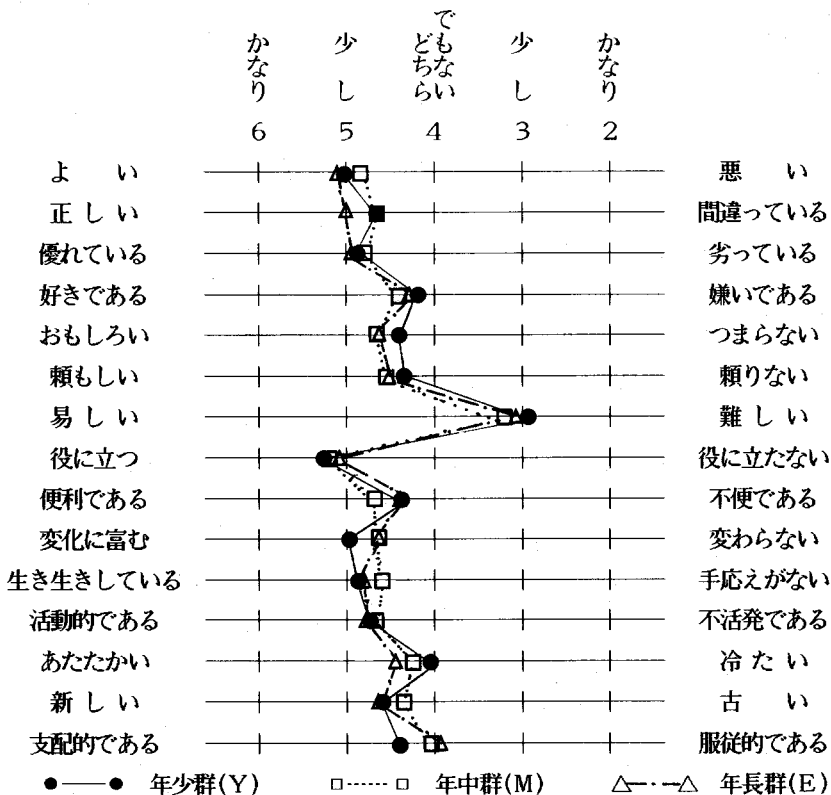


図8 “習熟度別学習指導”のプロフィール

ベテラン層の方がやや好意的認知を示している点も、一致している。

(9) 生活科

“生活科”のプロフィールを図9に示す。図9から、かなり新しく、変化に富み、活動的であると認知されている。また、少しおもしろく、役に立ち、生き生きとして、あたたかいが、かなり難しいと捉えられている。1992年度から本格的に実施される教科ではあるが、既に先導的に取り組んでいる学校もあり、教え方の難しさなどの困難さを経験している教師も多いと思われる。好意的な認知が見られても、難しさを強く感じている点は、それが反映したものと言えよう。

F検定の結果、「易しい—難しい」( $F=7.081, df=2/159, p<.01$ )「変化に富む—変わらない」( $F=3.072, df=2/159, p<.05$ )「生き生きしている—手応えがない」( $F=4.271, df=2/159, p<.05$ )「新しい—古い」( $F=3.586, df=2/159, p<.05$ )の4尺度で有意差が見られた。多重比較の結果、年少群は年長群や年中群と比べて、より新しく(Y-E;  $p<.05$ , Y-M;  $p<.05$ ), より難しい(Y-E;  $p<.01$ , Y-M;  $p<.01$ )と認知され、年中群は年長群と比べて、より変化に富み( $p<.05$ ), 生き生きしている( $p<.01$ )と認知されていることが見出された。全体を概観すると、若年層や中堅層はベテラン層と比べ、より好意的に捉えられているが、従来にない新しい教科として、指導の難しさを強く感じていると推察できる。本格的実施後、2~3年を経過した時点で再度調査を行い、認知の仕方がどの様に変化するのか、検討することは今後

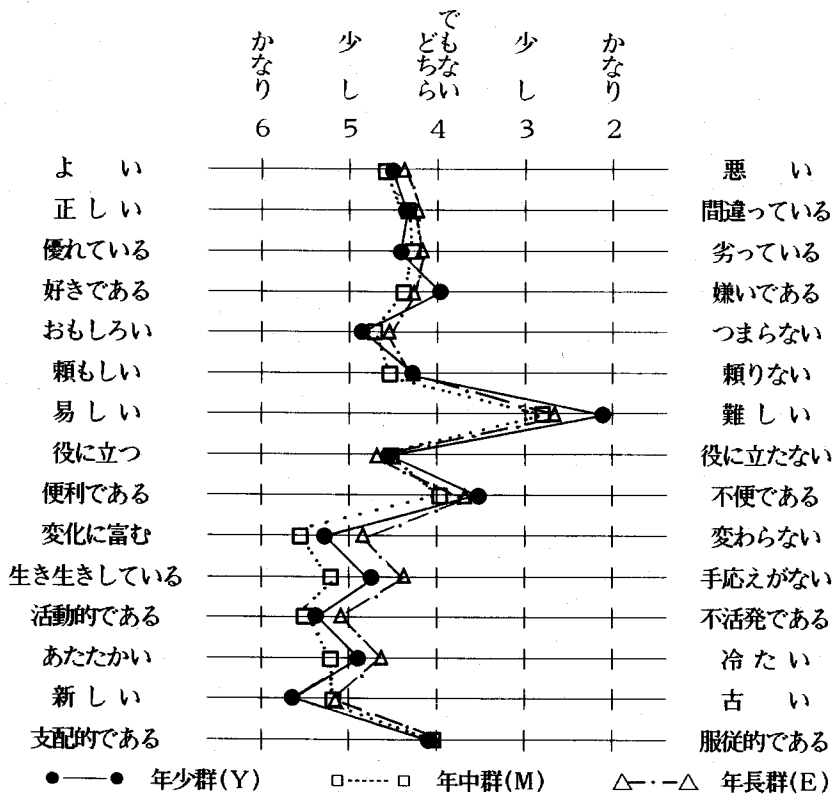


図9 “生活科”のプロフィール

の課題であると言えよう。

(10) 自己教育力

“自己教育力”のプロフィールを図10に示す。図10から、かなりよく、正しくて優れており、頼もしくて役に立ち、新しいものと認知されているが、一方では、かなり難しいものと認知されている。価値的・魅力的・活動的・潜在的評価の4次元の全尺度と「難しさ」を除く実用的尺度において、好意的な認知が見られた。

F検定の結果、全尺度で有意差が見出されず、認知の世代差は存在しないことがわかった。このことは、他の9つの刺激語の反応とは違う点である。

各尺度の評定値の標準偏差は、他の刺激語と比べてかなり大きいことを見出された。このことは、個人差が大きいことを意味するものである。また、被験者間で相反した評定も見られた。これらの点は、“自己教育力”という概念が明瞭でないことを反映した結果ではないかと思われる。“自己教育力”という言葉は、教育現場で「流行」している用語であるが、その定義づけもあいまいであり、ムードに流されてしまっている危険性を内包しているのではないだろうか。教師に各自が抱く“自己教育力”のイメージを自由記述してもらい、その内容とSDプロフィールを照らし合わせて、検討する必要があるだろう。

3. まとめ

小学校の教師162名を被験者として、10種類の教育評価や学習指導に関する用語に対して抱

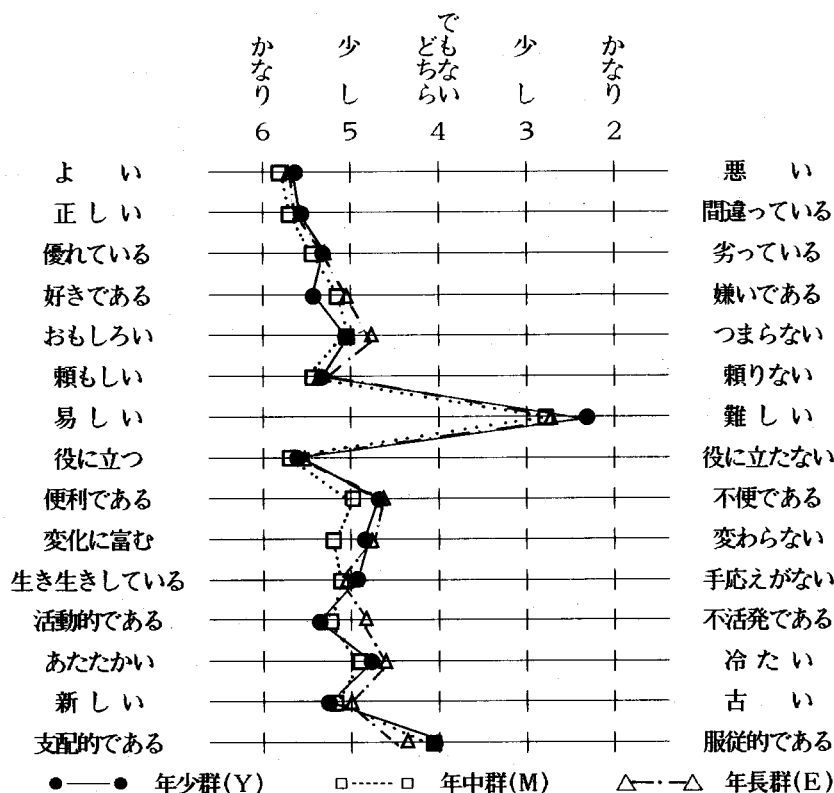


図10 “自己教育力”のプロフィール

くイメージの認知について、井上(1979)が用いたのと同じの形容詞対15対からなるSD法を用いて調査を行った。多くの形容詞対で認知の仕方に世代差がみられた項目は、“指導要録”“絶対評価”“完全習得学習”などであった。“指導要録”は若年層程、非好意的な認知を示しており、“絶対評価”や“完全習得学習”は若年層程、中立的な認知を示していた。また、“相対評価”は2尺度のみで群間差が見られたにすぎないが、プロフィールを概観すると、若年層程、非好意的な認知傾向を示していた。“生活科”や“自己教育力”は概ね好意的に捉えられていたが、難しいものと感じられていた。先行研究(井上, 1979)と比較すると、本研究の結果は、概して、井上の知見を支持するものとなっていた。

最後に残された課題について述べよう。本研究の被験者は小学校の教師であったが、教科担任制をとる中学校の教師に対して、同一の調査を行い、比較・検討することも必要であろう。井上(1982)の研究と同様に、教師の専攻差が認知の仕方に何らかの影響を及ぼすであろうと思われる。また、既にデータを入手している小学校の管理職(=校長)の認知の仕方と比較することも、意義があるだろう。本研究では、SD法という測定用具で教育評価や学習指導に対する意識を調べたが、SD法の持つ限界を念頭におく必要がある。自由記述や面接法を併用して、より深いレベルでの意識を解明することが求められよう。

[付記] 本研究は1990年度岩手大学特定研究経費によって実施された。本研究の一部は、日本教育心理学会第33回総会で口頭発表された。本調査に回答を寄せていただいた先生方に厚く感謝いたします。

## 文 献

- 井上正明 1974 教師の教育評価用語への認知的態度に関する研究(1) —小学校教師における年代差および性差の比較について— 福岡教育大学紀要, 第4分冊 教職科編 24, 51-65.
- 井上正明 1979 教師の教育評価に対する意識構造(1). —SD法による年代差の分析— 福岡教育大学紀要, 第4分冊 教職科編 29, 105-121.
- 井上正明 1981 教師の教育評価に対する意識構造(2) —管理職教師群と一般教師群との比較— 福岡教育大学紀要, 第4分冊 教職科編 31, 133-148.
- 井上正明 1982 教師の教育評価に対する意識構造(3) —福岡県における中学校教師の世代差と専攻差— 福岡教育大学紀要, 第4分冊 教職科編 32, 133-151.
- Osgood, C.E., Suci, J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning*. University of Illinois Press.